

# 筑波医療科学

Tsukuba Journal of Medical Science

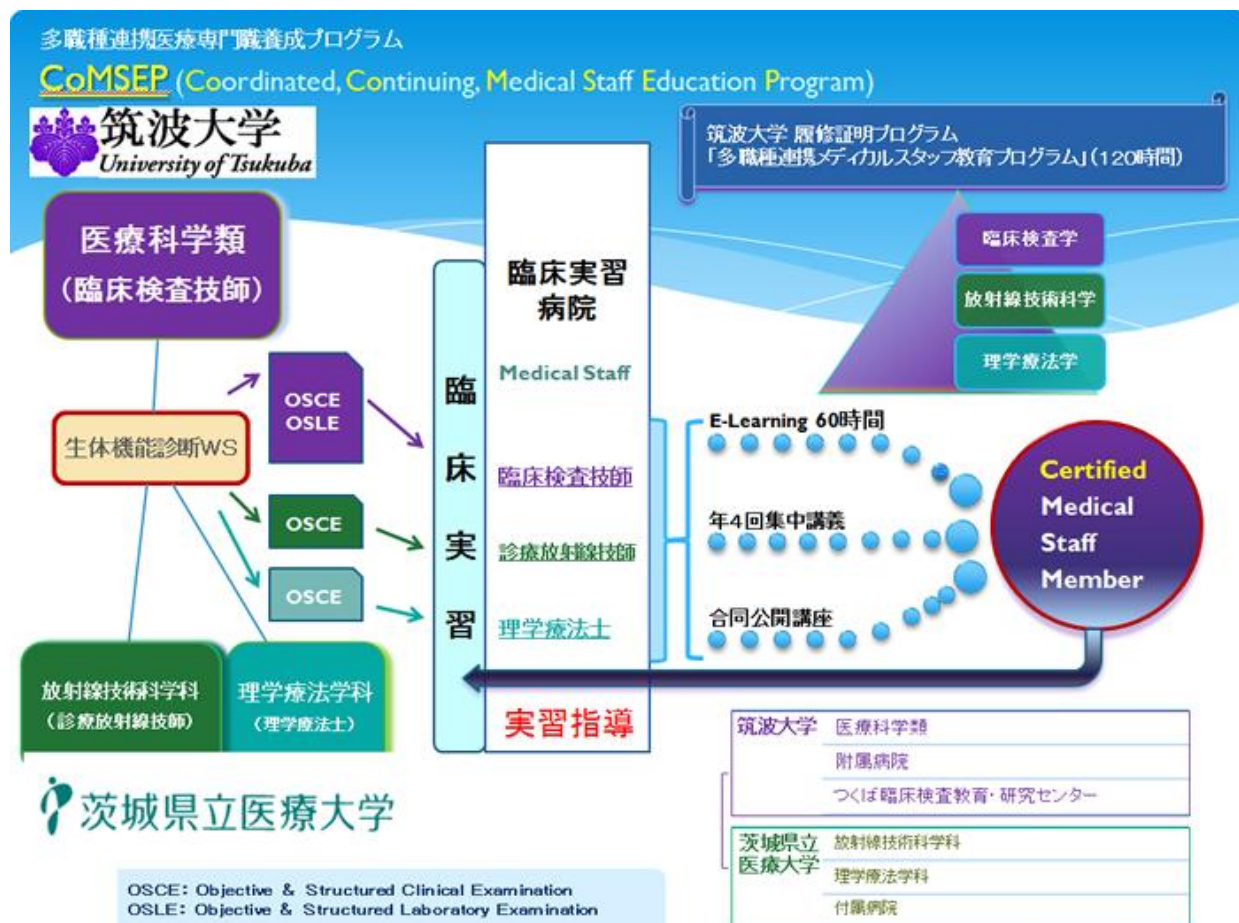
On-Line Journal

URL <http://www.md.tsukuba.ac.jp/public/cnmt/Medtec/journal.htm>

TJMS 2014; 10(3): 1-3

## 多職種連携医療専門職養成プログラム

CoMSEP (Coordinated, Continuing, Medical Staff Education Program)



# 筑波医療科学 第10巻 第3号

Tsukuba Journal of Medical Science

Volume 10, Issue 3 (2014, December)

## 【目次】

- 【特別寄稿】 多職種連携医療専門職養成プログラム（CoMSEP）  
担当にあたり . . . . . 1 - 2  
関本 道治（筑波大学医学医療系 助教）
- 【特別寄稿】 茨城から、そして全国へ . . . . . 3  
曾田 雄一（筑波大学医学医療系 助教）

## 【特別寄稿】 多職種連携医療専門職養成プログラム(CoMSEP)担当にあたり

関本 道治 (筑波大学医学医療系 助教)

平成 26 年 12 月 1 日付けにより医学医療系助教職を拝命いたしました関本道治です。宜しくお願ひ致します。前任は、東京大学医学部附属病院で診療放射線技師として業務していました。

筑波大学では、平成 26 年度 文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業の多職種連携医療専門職養成プログラム (Coordinated, Continuing, Medical Staff Education Program; CoMSEP) を担当します。CoMSEP は、筑波大学医療科学類 (臨床検査技師) と茨城県立医療大学 (診療放射線技師, 理学療法士) の養成課程との共同で高度医療人材養成を行います。これは、学部教育と卒後教育とそれぞれのプログラムを作成し、より多くの高度医療人材メディカルスタッフを育てる目的です。私が与えられた役割は、茨城県立医療大学が養成する診療放射線技師と理学療法士をメインに学部教育と卒後教育プログラムを作成、および履修証明プログラムの作成です。特に、学部教育プログラムは、臨床実習前の客観的臨床能力評価 (OSCE, OSLE) を実施することにより学生から医療へ対する意識をさせて医療専門職の育成を目指して行きます。

私が思う教育とは、質の高い医療を提供出来る専門知識と豊かな人間性を備え、将来高度医療のリーダー的存在になれる学生を指導すること考えます。診療放射線技師の立場としては、高度な技術を要求され、メディカルスタッフの連携もより

深みをましている昨今では重要な役割を担う存在と言えます。私が診療放射線技師として勤務して感じたことは、診療放射線技師として専門職における知識は高められるが、独自で多職種の知識取得するしかないことへの不満でした。診療放射線技師の立場では、理学療法士が学ぶ身体に障害がある患者さんに対する適切な動作に関する知識やリハビリテーションに関する知識が必要となります。また、臨床検査技師が学ぶ尿や血液から得られる生体化学分析、脳や呼吸等の生理機能評価に関する知識が必要となります。業務多忙化が進む昨今、特に専門職化が進んでおり、専門職以外を学ぶことは時間的に困難であると言えます。これらは、診療放射線技師として適切な診療画像を取得するうえで重要なことで、臨床現場を出た直後から必要になります。その為、学生から多職種の知識を得る事は重要な事と考えます。

卒後教育の充実化も重要です。現在の卒後教育は、学会主催で開かれることが大半です。私の経験から、学会主導の卒後教育には満足していますが、細かい内容や基礎的な内容を聞く場所としては補えていないと思います。本プログラムが提案する履修証明プログラムは、学部課程から卒後まで継続的に交流が行えるシステムであるため、学会主導の卒後教育より気軽に知識の充電が行えます。また、大学-実習病院の連携強化により学会活動の活発化も期待できると推測されます。

多職種連携医療専門職養成プログラムは、連携

が少なかったメディカルスタッフがこのプログラムを通じてより交流を深めることでチーム医療の向上につながるよう運営をして行く次第であります。そして、日本全国により多くの高度医療人材養成プログラム出身者を出す事を目指して行きたいと考えています。まだまだ若輩者ですが、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

## 【特別寄稿】 茨城から、そして全国へ

會田 雄一（筑波大学医学医療系 助教）

今後 20 年間で臨床検査の分野においてもユビキタス化がますます進むと考えられ、その兆しとして今年 4 月に制度化された「検体測定室」が挙げられます。病院に目を向けると、現状においても、検査室には多くの医療機器が並び、迅速に正確な検査結果が医師に報告されています。医療機器が進歩すれば、今は一部の病院に限られている検査が多くの病院で簡便に実施されるようになることが予想されます。こうした状況を踏まえると、検査結果を出す工程では臨床検査技師の役割は小さくなりつつありますが、得られた検査結果の妥当性、つまり臨床検査の質の保証においてはその役割はますます重要になると思われます。今後、都市と地方の格差、また同じ地域でも病院間の格差が大きくなるかもしれませんが、検査室が病院のアキレス腱となるような状況、例えば、最新の医療機器を有し、医師も確保できている病院に、知識・技術の優れた臨床検査技師がいないという状況は避けなければいけないと考えています。そのためにも、勤めている地域に関わらず、生涯を通して学び続けられる環境を作っていくことが重要になると思われます。

いわゆる地方である茨城県に立地する筑波大学と茨城県立医療大学が、この度、新しい試みを共同で進めることになりました。両大学が申請した「多職種連携医療専門職養成プログラム」が文部科学省の課題解決型高度医療人材養成プログラム

に採択され、現在、来年度からスタートする e-learning による履修証明プログラムの準備を進めています。臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士の 3 職種は、病院のそれぞれのセクションで日常業務に従事しており、患者さんを「連携して」サポートする機会は少ないのが現状です。そこで両大学は、卒前・卒後を通してチーム医療への意識を高め、実臨床の場で「連携」を実践していただくために、学生および各医療専門職の方々に学部教育プログラムや履修証明プログラムを提供していきます。本事業が円滑に進み、プログラム参加者のお役に立てるように微力ながら努めてまいります。そして将来、本事業が大学の地域貢献のモデルケースになるように、事業期間内にプログラムの改善を進めてまいります。プログラムに参加された方々が他の医療専門職との接点を見出し、自身の病院で実践できる多職種連携を進めていただくことを願っております。

筑波医療科学 第10巻 第3号	
編集	筑波医療科学 編集委員会 二宮治彦 磯辺智範
発行所	筑波大学 医学群 医療科学類 〒305-8575 茨城県つくば市天王台 1-1-1
発行日	2014年12月16日